

新たな成長を模索する多民族国家ブラジル

消費流通経営研究所 代表
安井耐介 氏



4月19日より10日間、日本小売業協会主催「ブラジル・ドバイ最新流通視察会」に参加し、ブラジル国では、リオデジャネイロとサンパウロの両市を訪問した。

最大の都市サンパウロでは、商業施設等見学の前に、ブラジル日本商工会議所、並びにジェトロサンパウロ事務所から、ブラジル経済と市場についてのレクチャーを受けた。またブラジル日通からのブラジル全土にわたる物流事情をブラジルダイソーからは流通事情についてうかがった。

UAEドバイ首長国訪問は、2009年以来2度目の訪問となったが、リーマンショックによる「ドバイバブル崩壊」から見事に立ち直り、「アラビア究極の未来都市建設計画」が健在に進行中であることを確認することができ、再訪した2つの巨大モールは更なる活況を呈し、中東を中心に多国籍の外国人で賑わっていた。

カーニバルとファベラが混在する “国民の関心はサッカーも生活も”

羽田空港を発って、37時間後ようやくガレオン空港に到着。はるばる日本の「地球の丁度裏側のブラジル」に初めて降り立ったという興奮と喜びで一杯であった。しかし、抱いていたイメージとはかけ離れた観光都市リオの現実にすぐに直面することとなる。

今年6月のワールドカップ、2年後に迫った2016年のオリンピック開催国ブラジルでは、少なくとも空港や都市部では大いに盛り上がっていると予想していた私たちは、残念ながらワールドカップのポスターもオリンピックの五輪マークも目にすることはなかった。街をあげて前月行なわれた「リオのカーニバル」の直後だったことを割り引いても、観光都市リオの街中にそのイメージを意識させるものは如何にも少ないと感じた。リオ訪問直前からブラジル全土に少しずつ広がりつつあったデモの発生は、いかに多くの国民がワールドカップやオリンピックも大切だが、それに投ずる大金を国民生活の向上に振り向けてほしいと願っているのが、直に街を歩き、ショッピングモールを訪れ、レストランで食事をしてみて感じられた。労働大国といわれるブラジルは多くの庶民の生活レベルから考えるとスーパーでの商品の値段やレストランでの飲食代はいかにも高いと感じた。因みにガソリン代はほぼ日本と同じで、1人当たりのGDPが日本の約25%であることを考えると物価や諸コストが高く生活しにくいのではないかと感じた。その中で陽気なブラジル人を見ていてなぜか“リオのカーニバル”の熱狂が何となくわかる気がした。

また、在リオデジャネイロ総領事館を訪問した際には、「治安上の注意事項」を細かく示したブリーフィングを渡された。特に殺人事件の発生率は世界一で、外出時の服装は極力控え目にと厳しく注意されるほどであった。たまたま私たちの訪問中は危ない目に合うことはなかったが、夜間の外出には殊の外慎重に努めた。市内にはファベラと呼ばれる貧民街があり、一般人は足を踏み入れないよう周りが低い塀で囲まれているといった理解しがたい風景をバスの車窓からながめた。

治安の悪さは織り込み済みで市内に多数あるコンビニは、24時間営業を標榜して拡大したが、犯罪の多発で、ほとんどが深夜営業するガソリンスタンドに併設されることとなっている。

南米最大の商都サンパウロ “経済は米国から中国へシフト”

南米最大の都市サンパウロは高層ビルが林立し、地下鉄もあり、州全体では、ブラジルのGDP総額50%を産み出す国内経済の中心都市である。日本企業も約450社が進出している。ヨーロッパ各国から渡ってきた移民の多くが最終的にサンパウロに住み着いた。文字通り人種の坩堝であり、多民族が共生して、独特の文化を醸し出している。



スーパーマーケット協会のパーティにて

日系移民1世から6世まで合せて150万人の中で当初からこの地域に住んできた人が多い。私たちは、移民の1人である松



サンパウロの街角

田社長が経営するMNプロポリス（1982年創業、養蜂製品の製造、輸出）の本社工場をサンパウロ郊外に訪ねた。近代的な工場見学の傍ら、松田氏から、

日系移民の長年の奮闘ぶりをうかがうことができた。市内に戻り、同社直営店でラーメンを賞味、私たち全員の評判は上々であった。サンパウロ市内の一街区は「東洋人街」が形成され、日本風の商店や食堂などが軒を連ねている。

ところでブラジル経済は世界第7位の大国であるが、すでにBRIC'sの面影はなく、貿易額では中国との関係が年々拡大し米国を抜いた。中国の景気変動がそのままブラジルの経済に影響を与えるまでになっている。

ブラジルの小売業で存在感を増す海外小売業大手

ブラジルでは近代的な小売流通チェーンが市場で大きなシェアを占めており、中規模クラスの都市まで含め全国展開している。上位4社はいずれも海外からの大手流通業が占める。①位は国内大手小売業でExtraなどのブランドを持つポンデアスカーを買収したフランスカジノグループのブラジレイリア（売上644億リアル、1999店舗）、②位がハイパーマーケット241店舗を擁するフランスのカルフル（売上340億リアル）、③位が最近急速にスーパーマーケットやハイパーマーケットの店舗網を拡大させ500店舗を超えたウォルマート（売上285億リアル）。④位はチリの最大手スーパーセンコス（店舗数221店舗）。

国内小売店舗の90%は中小零細のパパママストアで地方都市のほとんどがパパママストアで占められており、都市のショッピングセンターは乱立気味で、新規のものは採算割れも多く見直しを迫られている。2013年度のブラジルのショッピングセンターの開業数は38カ所。一方、インターネット販売は物流システムが不備のため思ったほど普及していない。

日系小売業では2012年大創産業（6.99リアルショップ）がオープンし現在2店舗展開し、好調に推移している。関税が高く、原価100円のことを、利益額20%を含めこの価格（6.99リアル）内に収めるのが大変という。アパレルではスペインのZARAが進出しているがブラジ

ルでの価格が世界で一番高いといわれている

“最高のものをつくれば最高の人が集まる”ドバイ

人口140万人（内、自国民は15万人）。アラブ首長国連邦の7首長国の1つであるドバイは、埼玉県程の広さに、近未来的な高層ビルが立ち並び、中でも大型豪華ホテル200以上（内5つ星50）が世界中から進出している（さらに増加建設中）様は圧巻である。

「世界最高の物をつくれば、人が集まる」との考えのもと、開発を進めている国で、ショッピングモールも||白押しの様相である。加えてドバイメトロ（鉄道）やバスの路線の増設を図り買い物客等の利便性も強化している。驚いたことにバス停は何とエアコンつきである。

今回はドバイ滞在日数が少なかったため主要な2つのSCを2009年に続き再訪した。

【ドバイ・モール】

2008年開業。総面積111万㎡。バージュ・ハリファ（世界一の高層ビル）に隣接。テナント数1200。店舗のほかスケートリンク、セガの屋内テーマパーク、水族館（ギネス登録の世界最大の水槽）、ゴールドスークなど数多くのエンタメを揃えている。



ドバイモールとその奥にそびえるブルジュ・ハリファ

レストラン数は120店以上。来店客は世界中から平日7万人、週末15万人。店舗は、世界の有名ブランドショップが揃い、日本からは、開業当初からの紀伊國屋書店に加え大創産業や良品計画、チョコレートメーカーが出店している。

【モール・オブ・ザ・エミレーツ】

2005年開業後、数次の増床を重ね総面積60万㎡。シェイク・サイド・ロードに面し、隣接して大型ホテルや中東で初めての屋内人工スキー場を併設し“Shopping Resort”を謳っている。平日7万人、週末15万人の来店。高級ブランドショップの数はドバイ・モールに劣らず豪華な専門店が並ぶ。また英国のハービーニコルズ、ディベンハム、カルフルなど多数のアンカーテナントを擁しとなり賑わいを見せていた。